

微小説

A NOVELS

「桜の木の上で」

加藤里 知夏絵 (かとうりちかえ)

毎年、桜の季節になると、わたしはこの公園にやってきます。
そして、一本の大きな桜の木の下で、そっと声をかけるのです。

「モンちゃん、降りておいで。もう一回、遊ぼうよ」

そして、長い尻尾が揺れているのを探します。
あのモンちゃんが、この木の上にいるのではないかと。

桜の匂いを嗅ぎながら、気持ちよさそうに目を細めているその姿が、もしかしたら見えるのではないかと期待しながら・・・

モンちゃんは、わたしの家に来たときから、大きな猫でした。
血統書のついた、「ベンガル」という種類の猫で、しなやかな尻尾を持つ、まるでヒョウをそのまま小さくしたような猫でした。

アーモンド形の瞳、薄い茶色の斑点が散らばった短い毛。
そして縞模様の長い尻尾。
これまで見たことのない、とてもきれいな猫でした。

近所のペットショップに初めてお目見えした時の値段は、25万円。
まだ年が明けたばかりの、寒い季節でした。

「ベンガル」はその当時、猫の新しい品種として、ちょっとしたブームになっていました。
そのブームはすぐに去ってしまったのですが、一時は、珍しい猫として、非常に高値がついていたのです。

そのペットショップの猫の中でも、人気のアメリカン・ショートヘアを凌ぐ値段がついていましたから、いくら可愛いとは思っても、とてもとても買えないと、いつもお店の前で眺めるばかりでした。

きっと、他の人もそう思ったのでしょう。
モンちゃんは、1ヶ月経っても2ヶ月経っても、そのままペットショップのゲージに入ったままでした。

モンちゃんは、少しずつ大きくなっていきます。
でも、とても細くて、ベンガルの特徴である長い尻尾ばかりが目立つようになって来ました。

しかし、「ベンガル」という種類の猫は、野生種の猫を人の手によってペットに作り変えたものです。
ですから、もともと大きくなる要素が強い猫なのです。

モンちゃんは、次々と入荷してくる子猫たちに比べると、かなり大きくなってしまいました。

ペットショップの人は、どんどんモンちゃんの値段を下げていきました。
最初の25万円から、3ヵ月後には18万円。
半年後には、13万円。

それと同時に、売れ筋の商品である子猫を真ん中にするため、モンちゃんは、だんだんと隅の方のゲージに追いやられていきます。
最終的には、一番端っこのゲージに移っていきました。

それでも、モンちゃんは売れ残っています。
秋も過ぎ、そろそろ冬の気配が近づくころになっても、まだ買い手はつきません。
とうとうモンちゃんは、そのペットショップの小さなゲージの中いっぱいになるまで大きくなりました。

わたしは、そんなモンちゃんをお店の外から眺めては、
「飼いたいけれど、家にはもう猫がいるし・・・」
と、ため息ばかりついていました。

そうして、毎日のように、売れ残った「ベンガル」を眺めていたある日、わたしは、あるディスカウントストアで、とてもショッキングなものを見てしまいました。

冬の風が冷たい季節。
コートやマフラーなしでは、まだまだ外を歩けない時季に、わたしは足早にディスカウントストアの駐車場へ向かっていました。

ディスカウントストアのペットショップの裏手、そこはちょうど、駐車場への通り道になっています。
すぐそばには、ゴミ捨て場があります。
そこには、大きな金網のゲージが置いてありました。

そしてその中には・・・売れ残り、大きく育ってしまったシーズー犬が、何頭も打ち捨てられたように詰め込まれていたのです。

一時期流行ったシーズー犬も、そのころにはブームが下火になり、ましてや大きくなってしまった犬など、商品にはならないのでしょうか。
ゴミ捨て場の脇に、まるで「これもゴミだ」と言わんばかりに、その犬達は置かれていました。

吹きっさらしの道端に、何の手入れもされないまま、値札が付けられているわけでもなく、ただ閉じ込められている犬達。
特徴であるはずの長い毛足も、伸び放題です。

申し訳程度の餌と水が置いてあり、おしっこも糞もそのゲージの中でさせているのか、シーズーたちの長い毛は、糞尿まみれになっていました。

まるでぼろ雑巾のようなシーズー犬たちが、風除けひとつない狭いゲージの中で、人が通るたびに尻尾を振るのです。
「僕達を連れてって、連れてって」
と。

あまりの無残な姿に、わたしは、そばに近寄ることが出来ませんでした。
そこを通る他の人々も、同じ気持ちなのでしょうか、目を逸らして通り過ぎます。

これが、ペットショップに買われて、売れ残った動物達の末路なのかと、衝撃を受けました。

わたしは、今でもその子達のことを、ありありと思い出すことができます。
そして、「うちには猫がいるから」「集合住宅だから」などと様々な理由をつけて、結局何もしなかった自分に、腹立たしい思いを感じるのです。

そんなかわいそうなシーズー犬を見て、わたしは家にとって帰し、すぐにあのペットショップへと急ぎました。
何だか、いても立ってもいられなかったのです。

モンちゃんは、まだ売れ残っていました。
値段は、なんと3万8千円にまで下がり、「大セール」の札が貼られていました。

「ほら、可愛いでしょう」
そういうペットショップの店主の顔には、
「やっと売れ残りが掃ける」
という気持ちがありありと浮かんでいました。

生き物を「大セール」してしまう、そのペットショップの店主に怒りを感じながら、
わたしはモンちゃんを家に連れ帰りました。

この時点で、モンちゃんは、ペットショップで1年を過ごしていたことになります。

「ベンガル」なのに「モンちゃん」という名前は、おかしいと思われるかもしれません。
実際、最初に付けた名前は「モンちゃん」ではなく、血統書に書かれた名前は、
「アービィ」といいます。

初めのうちは「アービィ」と呼んでいたのですが、擦り寄ってくるさまが「もによもによ」という感じだったので、何となく「モンちゃん」になってしまったのです。

モンちゃんは、とにかくよく食べました。
お腹いっぱいであるはずなのに、まるで「次はいつ食べられるかわからない」といった様子で食べるのです。

わたしの家には、すでに1匹猫がいました。ラビちゃんです。
ラビちゃんは、近所で親猫とはぐれて鳴いていたのを、見るに見かねて連れてきました。
2～3日、親猫を求めてずっと鳴いていたせいか、声が枯れてしまい、もうかすれ声しか出せない子です。

もともと親も野良猫だったので、全く人に擦り寄ることをせず、抱き上げて連れ帰ることが出来ませんでした。
そこで、1mおきに猫の餌を地面に置いて、玄関まで1時間かけておびき寄せて、
やっと捕まえたのです。

今から考えると「誘拐」のようなものですが、飢えと渇きでふらふらしながら、降り出した雨が伝うゴミ袋を必死で舐めている姿を見てしまったら、もうどうしようもなくなってしまうわけでした。

ラビちゃんはとにかくおとなしいので、すぐにモンちゃんにご飯を取られてしまいます。
ラビちゃんのお皿にモンちゃんが頭を突っ込んできても、ずっと身を引いて、ただ眺めているだけ。
そしてわたしの顔を見て、声にならない声で「にゃあ」と訴えるのです。

だから、こっそりラビちゃんにご飯をあげようと、わざわざ離れたところにお皿を置いてあげても、ご飯がお皿に入る音を聞きつけたモンちゃんに、また横取りされてしまうのでした。

そんな話を行きつけの獣医さんに話したところ、こんな話をしてくれました。
「良心的でないペットショップは、仕入れた動物が大きくなると売れなくなってしまうから、あんまり餌をあげないようにするんだよ。そうすれば、見た目は小さいままだからね。きっとこの子も、お腹いっぱい食べたことがなかったんだろうね」

だからモンちゃんは、いくらお腹がいっぱいになっても、決して心が満腹にならなかったのでしょう。
その飢餓感を想像して、わたしは胸が締め付けられる思いでした。

思う存分ご飯を食べられるようになったモンちゃんは、見る見るうちに巨大になりました。
さすがはもと野生種、といった感じです。

とは言っても、わたしの家に来たとき、モンちゃんはすでに1歳を過ぎていたのですから、立派な大人の猫です。でも、ペットショップにいた時は、まだ子猫のような体型でした。それが今では、見た目はラビちゃんの1.5倍。

甘えん坊のモンちゃんは、その大きな体で、ラビちゃんにじゃれ付いていくのです。ラビちゃんの方は、たまったものではなかったでしょう。それでも、気性の優しいラビちゃんは、よっぽど強く噛み付かれてもしない限り、モンちゃんの好きなようにさせていました。

尻尾を立てながら擦り寄り、体を舐め、仲良くじゃれていたかと思うと、お団子のようになってケンカ。

実際、狭い部屋に猫2匹では、本当は良くなかったのでしょうか。ラビちゃんは、急にやってきた大きな猫に居場所とご飯を取られ、ストレスが高じたせいか、耳がハゲてしまいました。

あまりにも可愛そうな有様なので、モンちゃんの予防接種も兼ねて、2匹を獣医さんに連れて行きました。

ラビちゃんは注射をされる時、押さえつけている必要がありません。「痛い」と鳴いてはいますが、基本的にはなすがまま、といった感じです。

そんなラビちゃんに慣れていたわたしは、モンちゃんのあまりの大騒ぎにびっくりしました。

獣医さんは、モンちゃんの種類が「ベンガル」と聞いたとたん、動物看護師である奥さんに「洗濯ネット持ってきて」と命じました。何に使うのかと思ったら、ベンガルは力が強く、大暴れするので、洗濯ネットに入れて、その上から診察や注射をするのだそうです。そうしないと、獣医さんの方が大怪我をしてしまうのだとか。確かに、大変な騒ぎでした。

大人3人がかりでモンちゃんを押さえつけても、注射針を刺したとたん、その人間の6本の腕を押しつけて逃げようとするのです。

「ペットショップの人は、すごくおとなしい子だ、って言ってましたけど」と恐る恐る打ち明けてみると、獣医さんは、モンちゃんを押さえつけながらきっぱりと、「ベンガルが？そりゃ、大嘘だ」と言い切りました。

予防接種から帰ってきて2～3日は、モンちゃんはすっかりいじけてしまって、拗ねまくっていました。わたしの手の届かないタンスの上に登り、長い尻尾をぶらぶらさせながら、じっとにらんでいます。

病院に行くのに使ったキャリヤーケースを見えないところに隠し、大好物のお魚をちらちらさせて、やっとのことでタンスの上から降ろしたのです。

その1ヶ月後、モンちゃんのとてつ手術をすることになった時も、大騒ぎになりました。手術そのものではなく、退院して帰ってきてからが大変。

よっぽど手術が痛く、怖かったのでしょうか。何日も泣きわめき、わたしは近所中にこの声が響き渡っているのではないかと、気がありませんでした。

エリザベスカラーを付けていますから、身動きすらままなりません。それでも、今までのように動こうとするわけですから、アクシデントが続出です。ベッドの下に潜り込もうとしては、エリザベスカラーがつかえてしまうのでぐるぐる回ってみたり、タンスの上へ飛び乗ろうとして、やはりカラーがつかえて途中で

落っこってしまったり。

カラーをはずせるようになった時は、モンちゃんだけでなく、わたしも大いにほっとしたものでした。

抜糸の処置が終わって獣医さんから帰るとき、いつの間にか、季節が春になっていることに気がつきました。
桜が咲き始めています。
ほんの少し、キャリアケースを開けて、桜を見せてあげました。

もう少しして、この近所に慣れてきたら、外に出してあげよう。
高いところの好きなモンちゃんは、きっとあの桜の木に登っていくことでしょう。
そうやって、1年間のペットショップでの暮らしを帳消しにしてあげよう。
わたしは、そんなことを考えていました。

モンちゃんはオスですが、ラビちゃんはメス猫です。
思えば、ラビちゃんの避妊手術のときも、大騒ぎだったのでした。

ラビちゃんは避妊手術をする前にサカリがついてしまい、それこそ近所中のオス猫を呼ぼうとしているかのように、毎晩大声を張り上げて鳴き続けました。

わたしのうちは、集合住宅です。
当然のことながら、ペットを飼うことは禁止されています。
それなのに、夜、ある時間になると、ラビちゃんは窓に向かって男の子を呼び始めるのです。

もう夏に近い時季だったというのに、わたしは家中の窓を閉め切って、サッシも閉めて、
「恋しい、恋しい」
と泣き喚くラビちゃんを持て余していたのでした。

なお悪いことに、ラビちゃんは「スプレー行為」まで始めてしまいました。
オス猫しかスプレーをしないと思っていたわたしは、もうびっくりです。
消臭スプレーを片手に、ラビちゃんを追っかけ回しました。

おまけに、ラビちゃんの声聞きつけて、近所中からオス猫たちが見物にやってきます。
のみならず、
「ここんちの子はオレのもんだ」
と言わんばかりに、わたしの部屋のドアに向かって、スプレーまでしていく始末。

自分の飼い猫のおしっこだけでなく、よその猫のおしっこの心配までしなくてはならず、もう、わたしはへとへとでした。

早く避妊手術を出来ればよかったのですが・・・
ラビちゃんは、卵巣機能が異常になってしまっていて、サカリが治まらなくなっていたのです。
サカリが治まらないと、手術は危険だ、と獣医さんは言います。
そうこうしているうちに、ラビちゃんのサカリは、半年も続いたのでした。

その状態を見た獣医さんが、
「このままサカリが納まらなると、ラビちゃんの体が持たないから、手術に踏み切ろうか」
と提案してくれたので、やっとその「サカリ騒動」から開放されたのです。

そんなことがあったので、モンちゃんの去勢手術は早めに済ませたのですが・・・

今となってみれば、わたしの勝手な都合で、余計に痛い思いをさせただけの結果にしかならなかったのです。

それでも、ラビちゃんもモンちゃんも、身勝手なわたしという飼い主に、よくなついでくれました。

ラビちゃんは拾い猫、モンちゃんは買い猫と、わたしの手元にやってきた経緯は違うものの、どちらもわたしの大事な宝物でした。

おっとり型のラビちゃんに比べると、モンちゃんの運動能力は、目を見張るものがあります。体のしなやかさ、ジャンプ力、力の強さなど、本当にヒヨウの子を見ているかのようです。抱っこしているわたしの腕から飛び出す時など、こちらがよろけてしまうほど。

しかし、野性味あふれるその外見とは裏腹に、とても甘えん坊で、いつも尻尾をピンと立てながら、わたしに擦り寄ってきます。拾った時から尻尾のなかったラビちゃんには、そんな真似が出来ません。

どちらの子にも愛想を振りまいておかないと、すぐに片方の子が拗ねてしまいます。どちらかと言えば、甘え下手のラビちゃんのほうが、拗ねていたことが多かったかもしれせん。

わたしは、そんなラビちゃんを片手にモンちゃんをなだめつつ、個人的には「猫に囲まれて幸せ!」と、能天気にも過ごしていたのです。

ですが、そんな幸せも、あまり長くは続きませんでした。モンちゃんがわたしのところへやってきて5ヶ月も経った頃、モンちゃんの様子が、おかしくなったのです。

満開だった桜も散り、季節は夏に向かっていました。猫たちは抜け毛の季節になり、わたしは2匹の毛をせっせとブラッシングしながら、「そろそろ、お外に出して一緒に遊ぼう」などと、うきうきしながら夏を待っていた頃でした。

わたしが寝る時はいつも、ラビちゃんがわたしの頭の横、モンちゃんは布団の上で長々と寝そべっているのが習慣でした。

ところがある日から、モンちゃんが、布団の中に入ってくるようになったのです。最初の2～3日は、「寒いのかな?」と思っていたのですが、よく観察してみると、わたしがいない時でも、布団の中にもぐりっぱなしのようです。

わたしが布団の中にいない間の2匹は、だいたいラビちゃんが下で、その上にモンちゃんがのしかかるようにしています。そして、ラビちゃんの半分ハゲた耳のあたりをしつこく毛づくろいしながら、べったりとくっついているのが常でした。

それなのにモンちゃんは、やたらと布団に潜り込み、抱き上げても、何となく覇気がありません。ただ、食欲はいつも通りでしたから、ちょっと具合が悪いのだろう、としか考えなかったのです。

獣医さんに連れて行き、「調子が悪いみたいなんです」と相談しました。多分風邪でも引いたのだろう、注射の1本でも打ってもらって、薬をもらってくればいだろう、という、軽い気持ちで。

しかし、獣医さんは、わたしに言いました。「即、入院しないと。血液検査をしないとはっきり言えないけれど、覚悟したほうがいい。多分伝染性の病気だから、ラビちゃんもすぐ検査をしよう」

「伝染性腹膜炎」という、恐ろしい、不治の病でした。発症さえしなければ、普通に生活していられますが、いったん発症してしまったら、数週間から長くて2～3ヶ月で死に至る、という病気です。

獣医さんの見立てでは、どうやらモンちゃんは、お母さんのお腹にいた時に、その病気をもらったようです。

「この子の病気は、きっと母体感染だよ。この子の兄弟の中にも、絶対同じように発症した子が何匹もいるはずなんだ。それなのに繁殖を続けさせるブリーダーもおかしい、そんなブリーダーから子猫を仕入れるペットショップもどうかしてる」

もしかしたら、ペットショップからわたしのうちへ、という環境の変化が、モンちゃんの中で眠っていた病気を起こしてしまったのかも知れません。しかも、ラビちゃんにも伝染っている可能性もある、と獣医さんは言います。

大事な宝物を、いっぺんに失ってしまうかもしれないという恐怖で、検査の結果が出るまでの何日間か、わたしは眠ることが出来ませんでした。

幸い、ラビちゃんにはその病気は感染していませんでした。しかし、病気が発症してしまったモンちゃんは、もう、獣医さんにも手の施しようがなかったのです。

獣医さんに出来ることと言ったら、病気を発症した猫がその命を終えるまでの間を、何とか少しでも楽に過ごさせてあげること、そして、猫が苦しむ姿に耐えられなくなってしまった飼い主のために、猫を安楽死させてあげることしかないのです。

でもその当時、わたしは、モンちゃんが助かると信じきっていました。

まだ半年なのです。生まれてからすぐに母猫と離され、ずっとペットショップのゲージに閉じ込められて、その小さな世界で1年間も過ごして・・・わたしの小さな部屋ではありますが、好きなだけご飯を食べられて、大好きな高いところへ自由に登ることが出来るようになって、他の猫とじゃれて遊べるようになって、まだ、やっと半年なのです。

そろそろ外に出して、一緒に遊ぼうと考えていたのに。閉じ込められていた分の時間を、これから取り戻すはずなのに。そんなモンちゃんが、ここで死んでいい訳がないと、そんなことがあつてたまるかと、わたしは固く信じていました。

「とにかく、最善を尽くそうね」という獣医さんの言葉に励まされ、モンちゃんとわたしは、その病気と闘うことになりました。

入院し、点滴を打ち、免疫を高めると言われるものは、何でも試してもらうように頼みました。モンちゃんがまた元気になってくれるなら、お金は幾らかかってもかまわないと思いました。

でも獣医さんは、このときすでに、モンちゃんがあと1ヶ月もないだろうことを、感じていたのだそうです。

「無駄になってもいいです」わたしは泣きながら懇願し、獣医さんは、わたしの気が済むのなら、と預かってくれたのでした。

このかかりつけの獣医さんは、非常に腕が立ち、なおかつ飼い主の気持ちをととても思いやってくれる先生です。そして、モンちゃんの病気のことをわたしに説明しながら、自分もモンちゃんの飼い主であるかのように、心を痛めてくれました。

モンちゃんは、獣医さんのところで十日間過ごしました。わたしは毎日、お見舞いに行きました。

初めのうち、わたしの顔を見たモンちゃんは、「帰りたい、帰りたい」と鳴きました。

点滴の針が固定されて、包帯でぐるぐる巻きになった片手を差し伸べて、わたしのほうへ擦り寄ってこようとします。そんなモンちゃんを見て泣き崩れるわたしを、獣医さんもその奥さんも、優しく慰めてくれました。

次の日、また次の日と時間が経つにつれ、モンちゃんはあまり鳴かなくなっていきました。
目に涙をいっぱいためて、力ないかすれ声を上げるだけ、体を動かすことも、辛そうな様子です。

日に日に衰えていくモンちゃんを、わたしはただ、ゲージの隙間から手を差し伸べて、そつとなでてあげることにしか出来ませんでした。

そして10日経って、獣医さんはわたしに言いました。
「家に連れて帰って、美味しいものをたくさん食べさせてあげなさい。したいことは、何でもさせてあげなさい。飼い主のそばに、いさせてあげなさい」
そして
「何の役にも立てなかったから」
と、入院費の請求書を、半分の値段に書き換えて渡してくれたのです。

わたしは泣きながら、モンちゃんを連れて帰りました。

家に帰ってきたモンちゃんは、病院にいた時よりも、心持ち元気になったようにわたしには見えました。

食べるご飯の量も少し増え、わたしに甘えて擦り寄ってくるようにもなりました。
一方ラビちゃんは、やっと部屋を独占できるようになったと思ったのに、またモンちゃんが帰ってきたので、かなり怒っていました。

そんなラビちゃんを叱ることもできず、わたしは、2匹の猫に快適な環境を与えられない自分に、腹立たしい思いを感じていました。

しかし、元気になったと感じたのは、単にわたしの願望がそう見えさせていただけだったようです。
段々と、モンちゃんの衰弱していく様子が見えてくるようになりました。

あんなにたくさん食べていたご飯も、日が経つごとに、のどを通らなくなっていきました。
水も、自力ではほとんど飲めなくなりました。

それでもモンちゃんは、力を振り絞って、トイレに立とうとしますのです。
「いいよ、いいよ、ここでおしっこしていいんだよ」
何度もそう言ったけれど、モンちゃんは、足をガクガクさせながらトイレに行き、うずくまりながら、おしっこをしようとします。
でも、もう、おしっこも出なくなっていました。

わたしは、毎日神様にお祈りをしていました。
近所の神社にお参りして、
「どうか、モンちゃんを元気にしてください」
とお願いしました。

神社の木々は、もう夏の緑の色です。
この緑をモンちゃんに見せてあげたいと、この風の匂いを感じさせてあげたいと、切に願いました。
せめて、狭いゲージの中で生きたのと同じ時間を、この世界で過ごさせてあげたいと思ったのです。

ですが、その願いはかなうことはありませんでした。

もう、モンちゃんは、ご飯を食べることはおろか、顔を上げることも苦しそうになってきました。
息をするのも、苦しそうです。

獣医さんは、モンちゃんよりもわたしの心を心配して、
「安楽死という方法もあるよ」
と言ってくれましたが、わたしは

「最後を看取ってあげます」
と、お断りしました。

モンちゃん言葉を理解してあげられないわたしは、
「自分ならどう思うか」
という風にしか、考えることが出来ません。
もしわたしなら・・・息を引き取るその瞬間を、何か自然ではない力で左右されてしまうのは堪らない、と考えました。

それが、モンちゃんの思いと同じだったかどうか・・・
今でもわかりません。

ただ、その時のわたしには、自分の価値判断でしか、モンちゃんの心を計る術を持ち合わせていなかったのです。

モンちゃんは、最後の最後まで、自力でトイレに行こうと頑張っていました。
もう、わたしは、それを止めませんでした。
ラビちゃんを抱っこしながら、モンちゃんが這いずってトイレに行くのを、ただ見守っていることしか出来ませんでした。

よく晴れたある日、わたしは、力ないモンちゃんの体をそっと持ち上げて、外の景色を見せ、風の匂いをかがせました。
「モンちゃん、そろそろ夏になるんだよ。元気になって、お外へ遊びに行こうよ」
モンちゃんは、少しだけ鼻を動かして、夏の気配の空気を感じていたようでした。

それがモンちゃんの、外で遊んだ最後になりました。

モンちゃんは、最後の時を、わたしの腕の中で迎えることになりました。
それが果たして、モンちゃんにとって本当に幸せだったのかどうか、わたしにはわかりません。

ただ、モンちゃんは最後、かすかに、本当にかすかに、一声鳴いて、息を引き取りました。

「よく頑張ったね」

どんどん冷たくなるモンちゃんの体を撫でながら、わたしはずっと、そう声をかけていました。

モンちゃんがわたしの家に来て、6ヶ月が経とうとしていた頃でした。
モンちゃんは、1年6ヶ月という一生のうち、たった半年だけしか、外の世界にすることが出来なかったのです。

獣医さんに、モンちゃんが息を引き取ったことを報告しました。
「あなたに看取ってもらえて、あの子は幸せだったよ」
獣医さんは最後まで、わたしの心を心配して、慰めてくれました。

公園の桜の木の根元に、モンちゃんをこっそりと埋葬しました。
よく遊んでいた、猫じゃらしのおもちちゃんと一緒に埋めてあげました。

本当はいけないことだと言うのはわかっています。
ペット霊園のことも聞いてはいましたが、それでも、わたしはどうしても、モンちゃんの体を骨壺に入れたいしかなかったのです。

どうしても、土に還してあげたかったのです。

そうしないと、モンちゃんはまた、外の世界から切り離されてしまう気がしたから・・・
だから、一番大きくて、枝振りの良い桜の木の根元に埋めました。

春になったら、モンちゃんのお墓の上には、桜の花びらが、雪のように降り注ぐのです。

高いところに登るのが好きだったモンちゃんは、きっと、桜の木の上に登って、尻尾を振りながら、それを眺めていることでしょう。

だからわたしは、桜の季節になると、その木の下へ行きます。
モンちゃんを埋めた地面ではなく、満開になった桜の枝の間を探します。
あの、長くてしなやかな尻尾が、揺れているのが見えるような気がするからです。

そして、わたしは、そっと声をかけます。
「モンちゃん、降りておいで。もう一回、遊ぼうよ」

[Back](#)